

日本語教室
学習発表会

3月20日(火)午後1時より、尼崎市立中央公民館大ホールで平成29年度の日本語学習成果を拜揮する、第9回学習発表会を行いました。

会場には、尼崎市南部保健福祉センター所長をはじめ職員の皆様、近畿中国帰国者支援・交流センター所長山下つねよ様、スタッフ研修講師安田乙世先生、その他たくさんの方がご臨席くださいました。



「日常会話楽しんでます」

牡丹グループの発表

市内で地域活動などを行っているグループが一堂に会して、尼崎にあふれる『ちよっとあったかい』活動を紹介しあう催しです。出演グループは、リトミック、子育てネットワーク、高校生の防災を考える活動など12グループ。それぞれ3分間のプレゼンテーションを行いました。

尼崎しみんシッパまつりに参加

3月31日(土) 尼崎市立中央公民館で、「尼崎しみんシッパまつり」が開催されました。

(牡丹グループ)、「四方山話」(梅グループ)、「学習した文型を用いた寸劇」(バラグループ)をテーマに、学習者たちは大きな舞台上で緊張しながらも、楽しんで発表していました。「来年はもっと上手にできると思います」と、来年への決意も語ってくれました。(田中いずみ)



田中いずみさんがコスモスの会を紹介しました

全国行政事務担当
者会議で「コスモスの会の活動」を発表

5月18日東京において、厚生労働省主催の「中国残留邦人等支援に係る全国担当者会議」が開催されました。

およそ180人が集まった席上、「先進市の事例発表」として、尼崎市(コスモスの会)の事例を、全国の方に紹介してほしいという近畿中国帰国者支援・交流センターからの推薦を受けて実現したものです。

後日、この会議に出席されていた尼崎市職員の方から、次のような報告をいただきました。

尼崎市では、コスモスの会という熱心な団体があるが、委託団体のない市では、自治体が直接このような事業を実施することになるので、今回の発表がとても参考になった。厚生労働省や他市からも参考になった、というご意見をいただきました。(田中いずみ)

第7回コスモスの会総会を開催

6月5日(火) 15時15分から尼崎市立中央公民館で2018年度コスモスの会総会を開催しました。昨年度の事業実績と会計報告、今年度の事業計画案、予算案を審議し了承を得ました。今年4月に尼崎日本語

教室を開催して10年を迎えましたので、10周年記念事業として地域交流事業「中国残留日本人への理解を深める集い」の開催や、記念誌の作成発行などの事業に重点的に取り組むことを決めました。(田村博志)

あんな話 こんな話

《西遊記》の中に、猪八戒、という豚の妖怪が登場します。日本語の『豚』のことを、中国語では『猪』と表現します。



《西遊記》中登場的、猪八戒、有着猪一般相貌。而汉语中的『猪』，在日语中用『豚』来表示。

先日、スタッフ研修会で『やる気・根気・元氣』という言葉が聞きました。10年前、尼崎日本語教室開設当初からボランティアとして、現在も日本語教室を支えておられるスタッフ3人の重みある言葉です。古希を迎えた私より一まわり上の大先輩。日本語教室の運営に携わっている私たちスタッフへの激励の一言となりました。この言葉に励まされてなんとか「かけはし15号」を発行することができました。(T)

中国残留日本人支援団体 尼崎日本語教室
コスモスの会だより
第15号 2018.9.1

かけはし

編集発行：コスモスの会広報部 〒661-0953 尼崎市東園田町4丁目152-16 TEL：06-6493-5563
コスモスの会ホームページ・URL=http://kosumosunokai.sakura.ne.jp/index.html FAX：06-6493-0817

尼崎日本語教室10年を振り返って



右から藤家さん、石井さん、高橋さん、石打さん(司会)

就きました。子どもが独立した時ずっと離れていた中国語を、もう一度と思い再開しました。2007年春頃、友達から「あなたに向いてるボランティアがあるよ」と言われ、結成されて間もない『中国「残留日本人孤児」を支援する兵庫の会』が始めた「生活講座」に参加したのが始まりです。

高橋さん 私が子供の頃、母は醤油屋を一人で切り盛りし、疎開して来た親戚の世話で、毎日が大変でした。父はシベリア抑留から、最後の引揚げで帰ってきました。子供たちが独立した頃でした、中国残留孤児のニュースをテレビで見ました。私は、もう外に残された人はいないと思っていたので、驚きました。父の姿と重なり、何か私にできることはないかと思ひました。

石井敏子さん
越智徹さん
高橋秀子さん
藤家みさおさん
宗景正さん

はじめに、参加されたいごかけからお願い致します。

藤家さん 大学では中国語を専攻したのですが、当時は中国語での就職は厳しく英語関係の仕事に

越智さん 私は、08年6月、残留孤児本人が自

身の体験を朗読する「私たち何じんですか?」の朗読劇を観たのがきっかけです。中国残留日本人問題を知り、戦中生まれではないと実感し、私と同じくこの問題を知らない人に伝えなあと、公民館や夜間中学での上演も手伝いました。

中国残留孤児はいまも神戸で開催しました。その時、兵庫県で支援団体を作りたいとの声が集まり、『中国「残留日本人孤児」を支援する兵庫の会』が発足しました。07年4月には裁判支援だけでなく生活に役立つことや日本語を学ぶ「生活講座」が始まりました。

その後、「兵庫の会」が前記の写真展を各地で開催し、そのことがきっかけで宝塚市では支援者が日本語教室を開設しました。尼崎でも地域に根を張った日本語教室が必要と思うようになりました。



宗景さん(右)

開設時にスタッフの参加や教材の準備はどうされましたか。藤家さん 宗景さんの熱意に押されて、私も尼崎教室への参加を決め、高橋さんは日本語学校の教師経験がある方と聞き早速訪ねていきました。高橋さん 藤家さんと教材の準備を始めました。週1回2時間ですので、分量などから、色を使ったりイラストがあり、楽しく使えそうな「文化初級日本語」を教科書に選びました。教科書の進度に合わせて、毎回「こんにちは」とか短い挨拶の会話文を作ってきて、先に藤家さんと二人でやって見せて、みんなに練習してもらいました。次に短い易しい文型から難しいものへと、短い文型が、その人の身体の一部になつたら、必要な時に日本語が出てきて、使いこ